

台湾から分子研の研究文化に期待する

増原 宏 台湾・国立交通大学理学院 講座教授



北大名誉教授、数学者、三宅敏恒さんの筆による

研究者はオリジナルな仕事をしたい、いい論文を書きたい、結果として優れた研究者として認められるだろうと願って日夜努力している。いわゆるいい論文は高いインパクトファクター、多い引用回数などの数値で格付けされ、研究者個人はもちろん大学や研究所のランキングに使われる。この数値を高くせよという方策が、世界中の大学、研究所で推進されているが、これは世界企業が経営効率を上げ、業績を争うのと似ている。自動車会社でいえば、燃費、環境負荷で競い、コストを下げ、販売台数のランキングが話題となる。ある国内メーカーが不振に陥った時、外国人社長がコストカッターとして登場し、V字回復を果たしたという話は有名である。その人曰く、目標を掲げ、なすべきことを具体的に指示し、無駄を徹底的になくさねばならないが、そのためにはクリアな数値を示すことが重要である。歴史、言語、習慣、社会、文化が違う多国籍企業では、目標を数値化することがキーポイントであると。

私は阪大応物を退職後台湾は新竹市にある国立交通大学で阪大時代とさほど変わらぬレベルの研究環境を与えられた。Optical Manipulation in

Chemistryの分野を開拓すべく努力しているが、先人はおらず、定型はなく、仕事の似通った参考論文は当初見当たらなかった。「私たちは何を研究すべきかを研究している」という段階にあるというのが私たちの判断であった。この新現象探索の研究において性能、分解能、速度、効率などの目標を数値化できなかった。結果として習慣、社会、文化の異なる台湾の研究者一般に、私たちの研究をいい研究だと十分説得できていないと感じている。自動車会社なら倒産するところである。しかしながら10年以上にわたって台湾政府と国立交通大学は、私たちの研究をサポートしてくれている。台湾の研究文化はこのような探索研究を受け入れる懐の深さがあることを示している。

翻って日本ではどうだったか。私たちのOptical Manipulation in Chemistryの発想を持ち、その研究を実践する機会を与えてくれたのは、JSTのERATOプロジェクトであった。その後20年にわたってJSPSとJSTは私たちの研究を支援してくれた。オリジナリティーの高い研究を試みよ、それはいい論文を作り、優れた研究者を生む、その研究アプローチを可能にしてくれたのは、日本が積み上げてきた歴史、習慣、社

会に根ざす研究文化であると感じている。

日本の大学にも、大学附置研究所にも、分子研にも、独自の研究文化が育っている。研究文化は時には数値目標の達成、それによるランキング競争に短期的にはマイナスとなるが、オリジナルな研究には不可欠のものである。目標を数値化することで習慣、社会、文化の違いを乗り越えようとする多国籍企業とは異なり、数値化しないで歴史、言語、習慣、社会、文化の多様性を研究に反映することが、オリジナルな研究と豊かな人材を育てると考えている。最近分子研と国立交通大学理学院との共同研究体制が整い公式交流が始まった。分子研の持つ研究文化が台湾で広く認識され、さらに数値目標に敏感なアジアから世界に広がっていくことを期待している。

ますはら ひろし

私は阪大応物を定年退職後、2008年より台湾の新竹市にある国立交通大学で研究室を持つ機会をいただき、現在杉山輝樹副教授、工藤哲弘助理研究員と運営している。スタッフは日本人だが、秘書、博士研究員2人、博士院生4人、修士院生10人は全員台湾人である。台湾において台湾人院生を相手に、日本式に研究室を運営する中で、習慣、社会、文化と科学の関係を考えさせられている。